

日本産オオハクチョウの成長観察

酒田市 角田 分

1. はじめに

近年、ハクチョウの飛来数の増加に伴い、送電線等へ接触し傷病鳥となりシベリアに飛去できなくなり、日本各地の池沼や湖で越冬するハクチョウが多くなってきている。山形県酒田市飯森山の人造湖「拳湖」でも、産卵したが、孵化しない事例が過去3回あった。この報告は、2005年4月～2006年2月までの産卵し孵化・成長したオオハクチョウの観察記録である。

2. 観察の概要

- 1) 観察場所 山形県酒田市飯森山 土門拳写真記念館敷地内の人造湖及び周辺
環境省識別メッシュマップ 06山形県16 酒田② 5839-2666
- 2) ハクチョウの種類 オオハクチョウ
- 3) 産卵場所・期日 記念館脇の拳湖南側の平地（植生は笹が主）
2005年4月19日～26日（新聞発表による）
- 4) 孵化期日 2005年5月26日

孵化後の初期には、家族群としての行動や親や幼鳥の行動を可能な限り1週間毎に観察し、行動について記録した。産卵数は、昨年今年とも4個である。

3. 観察記録（抜粋）

1) **18日目**（6月13日）



ヒナが誕生したが、これまでの経緯があり、自由の身にはなれなかった。産卵小屋の南側を広げ、約一坪の空間を設け、その部分に水入れパットが置かれた。

※酒田市白鳥を愛する会の考え方・・・

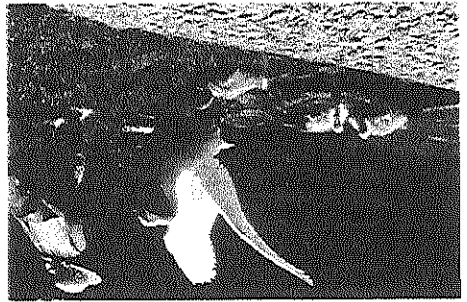
しばらく自然界の危険から守るためという。

2) **26日目**（6月22日）

ハクチョウが自由の身になったのは、午前10時。家族群で拳湖に入ったのは、午後四時を過ぎてから。突然の環境の変化の中で、親鳥が周囲の安全を確認するのに約6時間

5) 58日 (7月23日)
 ヒナが尾羽を極端に上げた。次の瞬間、脱糞。肛門から出てきた瞬間の糞は、草の色と同じ緑色(白く見えるのは、おしっこにあたる尿酸の部分だと思う)である。その後2~3回肛門を開いたり閉じたりする動作を確認。草原に落ちていた糞は、酸化で黒くなって

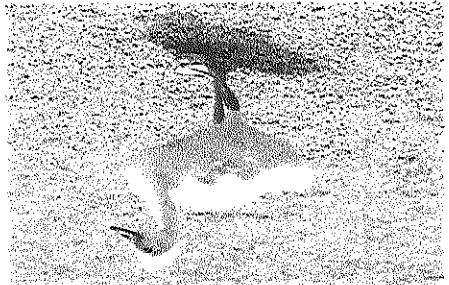
を表している。これまでの観察例から推測される。この後看板が設置された。
 襲うという珍しい行動である。この首の曲げ方は白鳥にストラスがたまっている時の様子もくと低くして、水面ぎりぎりの線まで下げ、次の瞬間に女の子に襲いかかった。人間をオスが首を下げ、子どもに警戒行動をとり、首をエサをやるうとしている子どもにも襲いかかった。



れる行動ではないか。
 の足踏み探餌は、親鳥もヒナも砂糞に砂を取り入水草もない場所。鳥には砂糞があるが、この場面ヒナもメスと同じに足踏み探餌。この場所は、を守る行動か。
 ている鯉に、親鳥がクチャビシで攻撃。これもヒナ

4) 51日 (7月16日)
 家族群が、親鳥がヒナを間に挟みながら市民が鯉にエサをあげる所に来た。水面に浮い

ヒナが完全に水に潜る行動。家族群で移動中のオスが、突然水面を走り出し、進行方向に



尾羽根も誕生羽、体全体がほとんど誕生羽。
 らしき物はあるが、大雨覆の存在が確認できない。
 日目のヒナは、頭から首はまだ誕生羽。翼に、羽根して親鳥とコミュニケーションを取っている。44
 る。探餌中も耳を澄ますとヒナが絶えず鳴き声を発
 いるが、探餌の場合ほとんど地面に座って草を食べ
 絶え間なく食べている。ヒナは、移動の時は立って
 ヒナは、アジサイとアジサイの間の部分に自然の雑草を餌として、その間を動きながら、

3) 44日 (7月9日)

午後4時半頃、家族群は岸辺で、必死に自然の餌を採餌。家族群の頭上をハシボソガラスが飛び10メートルほど先の芝生に下りた。その途端、オスと
 思われる個体が、猛然と地上を走りカラアスに襲いか
 かって追い払った。その行動を見たメスと思われる
 個体は、ヒナ三羽を自分の周辺に呼び集め(?)池
 の中央部分まで進んでいった。



も要したことも観察記録として重要なことであると思う。

いるということが言えそうである。

伸びをする行動も地面に座ったまま、頭の高さから羽根の先・足の先まで伸ばしている。

3機のヘリが上空を通過。伸びていたヒナも首を持ち上げ、頭を傾けて上空を注視。カラスの飛来やカルガモ・コイ・幼児などには、警戒の様子を全く示さないヒナも上空の音には警戒の気配を示した。

6) **66日目** (7月31日)

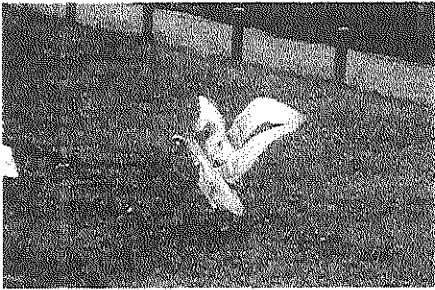
水に入っているヒナがコイを追いかける行動を。

7) **68日目** (8月2日) 夜

昼の様子と違うのは、オスメス共に座り込んで頭だけを伸ばして警戒。

ヒナ3羽は斜面の東側に池に向いて座り込んで採餌。オスメス共に池とは反対の陸側を向いて座り込んでいる。外敵に対応できる体制か。

8) **79日目** (8月13日)



タライに給餌されている餌を食べている様子。幼鳥3羽が、必死に食べているのに、親は回りに立って見ているだけである。警戒している。子どもが食べ終わるのを見ていて親が食べる行動というように見えた。

幼鳥2羽は、翼を大きく羽ばたいて、陸の上で走り出す動作。5mほどを走ってその動作は止めた。

9) **115日目** (9月17日)

9月12日 Y新聞の記者からのT.Vで、幼鳥が飛んだ事を知る。(110日目)

タライの餌へカルガモが上陸を開始。カルガモは白鳥を避けて上陸。首を伸ばしても届かない位置を通る。白鳥は眠ったままでも、目は、カルガモを追っかけている。

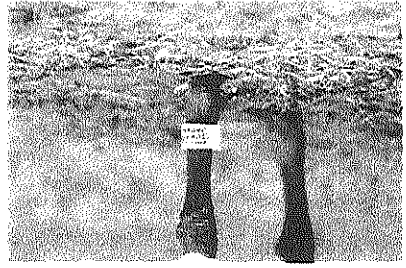
10羽以上のカルガモがタライの餌を食べ始めた。一番遠くで眠っていたメスが立ち上がって近づいてきた。もちろんカルガモは逃げる体勢である。逃げる時に幼鳥が近くを通りすぎたのにが攻撃している。ハクチョウとカルガモのバトルにスズメも加わっても、スズメには攻撃を仕掛けない。

水に入っていた幼鳥群が、3羽で移動。親鳥はまだ動いていない。親との距離が30m以上になったら、親が慌てたように後を追った。自由行動の兆しか。

10) **118日目** (9月20日)

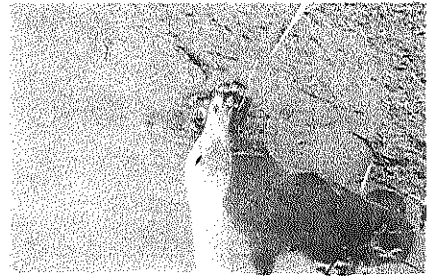
幼鳥の断続的なココココという声と首振りが頻繁に聞こえ家族群がどんどん池の縁に近づいた。鳴き声がちょっと変わったら、幼鳥が水面を走り、後にオスはその次にメスが走っている。幼鳥とオスは飛び上がることができたが、メスは右側の羽がほとんど欠損して

ヒナが今まで見たことのない「反転水浴び」を始めた。この水浴びは、これまでの観察では、大部ゆくりした感じの時に行われる水浴びだったが、餌をもらって満足したのだろうか。ひっくり返りの水浴びとほとんど一緒に行われる水面を「羽ばたきながら走り回っての水浴び」も始めた。羽を水面に叩きつけるように走り回って、時にはその勢いで頭から水につっこ



11) 159日 (10月30日)
10月21日市役所環境課から電話で山階鳥研でヒナに標識を着けたいとの連絡あり。

行動のように思えた。その後、家族群は、小さな池の中央部分まで進み、そこで足踏み探餌を始めた。探餌といっても、この池は水深も浅いし、草も生えていない。同じように土か砂を食べているように思えた。足踏み探餌は、前の時も草を食べるよりも土や砂を・



探餌行動をよく見ると草ではなく、土か砂をチャピチャピと口でこし取っているように見える。クチバシは水面に対して水平。水面にアオコが発生しているが、食べているのはアオコではないようだ。5羽全てが同じような食べ方をしている。何だか砂礫に入れる砂でも食べているように思う。その行動を延々と10分以上継続。彼らにとって、とても重要な

移っていった。

ないで、着水している。戻ってきた幼鳥と親の劇的なポーズを期待したが、水面を必死で群れに近寄ろうとしているメスに構わずに、何ということもなく集まって、探餌行動へと



足を出して構えず、水面に着水する寸前まで足を出されまでの着水観察と若干違い、上空から着水のためのをしながら着水場所を探している。着水の様子は、こきた。もう1羽東の方から戻ってきた。2羽とも旋回飛び去ってから2分後、西の方から幼鳥1羽が戻って声も聞こえない。メス親の甲高い声はまだ続いている。北の方に飛び去った幼鳥の姿も見えないし、幼鳥1羽とオスが舞い下りたのを見るとそちらの方に泣き叫びながら水面を近づいて行くき声の大きさの数倍も大きな声で、泣き叫んでいるという表現の方が正しいかも知れない。上がれなかったメスは、けたましい大きな声で鳴いている。いつも聞いている白鳥の鳴にカーブを描きながら視界から消え去ってしまった。4羽が飛び上がった瞬間から、飛び舞い下りた幼鳥の近くに下りてしまった。飛び上がった2羽の幼鳥は、東側から北の方角の東端の水面に下りてしまった。その後飛び上がったオスも羽が若干欠損しているためか、幼鳥2羽は、東側の空高く舞い上がったが、もう1羽の幼鳥は、まだ飛翔力がないのか池いるために水面を走ることができたが、飛び上がることはできない。最初に飛び上がった

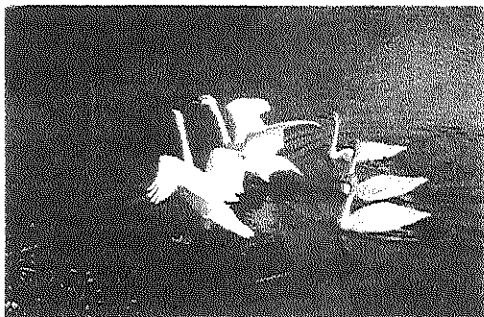
でいく水浴びもしている。

足輪の番号は、最初はローマ字で3段に刻まれ1段目がKANKYOSHO 2段目がTOKYO 下段がJAPAN。番号が05A-00354だ。

たくさんの白鳥達が直線距離にして約2000mの最上川スワンパークに来ているのに、飛んでいかない。家族で行動していることは家族の絆の強さか？シベリアに飛んでいけるか心配になってきた。

12) 179日目 11月19日

最上川の方から白鳥の声。見ると東側に、飛翔する白鳥が見える。水面で採餌していた



ヒナ3羽が、鳴き声に吸い付けられるようにすーと親鳥の方に寄っていった。親鳥は、羽を震わせて、まるでこっちへ飛んできてくれとでもいうように甲高い声鳴き声を上げ始めた。しかし、飛翔白鳥は、間もなく見えなくなり、その声も聞こえなくなってしまった。

家族群は、親と子が向き合い顔を見合わせている。すぐに何事もなかったように、採餌行動を始めた。

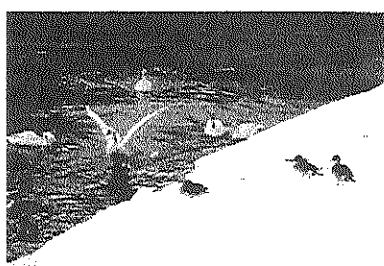
13) 216日目 12月26日

拳湖もほぼ結氷し東側の池との連絡通路部分付近約10㎡だけ水面あり。

親鳥2羽と幼鳥2羽しかいない。足輪装着個体を確認。後日、写真館の職員に確認した所、幼鳥3羽の最終的確認日は12月11日。12日は休館日。13日には幼鳥は2羽だけ。12日～13日にかけて、酒田では近年にない積雪。その寒さで死亡し雪の下に埋まっているのかも不明。13日に建物の階段付近に血液の跡のようなものがあり、動物に襲われた可能性も否定できないという。

選択肢として、飛去も考えられるが、この日の観察の時にも感じたのだが、食べ物が不足しているためだと思うが、親鳥のうちで特に大きかったオス親でさえ、随分小さくなったという感じがしており、し、常に行動していた家族群のことを考えると1羽だけの飛去の可能性はとても小さいと思う。

14) 256日目 2006年2月4日



最上川河口の白鳥がめっきり減少（積雪のため採餌不能）。拳湖に36羽のコハクチョウが飛来。4羽の家族群は、コイの餌場をテリトリーとしているらしく、この場所に近づくコハクチョウを追い払う行動を何度もとっていた。冬場になり、餌の少ないことからこのような行動をとるのだろうか。（餌の争いで、オナガガモや鯉にも噛みついてたが）

越冬地での環境が白鳥にとって悪化する中で、日本で越冬し繁殖するものが増えることが予想される。これからもこのような観察例を集めながら、日本産白鳥に対する日本白鳥の会としての基本的な態度も必要となるのではないだろうか。(文責角田)

5. おわりに

ればならない。

⑧ 産卵育雛するためには、番に安心して育雛できる広い縄張りが確保されていない。モなどの他の動物に対して威嚇行動をとっていた。

⑦ 自然の餌が少ない時期になると餌を確保するために、幼鳥もカルガモ・オナガガモ目であった。

⑥ 羽ばたいて走る行動など70日程度に見られたが、初めて飛翔したのは、110日であった。

⑤ 幼鳥の水浴び行動には、潜水浴、反転浴、羽ばたき浴など成鳥と変わらない。

④ 足踏み採餌は、家族が一緒にいる。砂や泥を取り込むときに行われるようである。が主であった。

③ 幼鳥が食べていた草は、スギナや稲科の植物の若葉、オオバコ、ヨシの若葉など100日以後になると一定の距離までの幼鳥の自由行動が許されるようだ。

② 家族群で行動するときに幼鳥を守る行動は、生後100日過ぎまで観察された。はらい行動、幼鳥に近づきすぎる人間に対する威嚇の動作も頻繁に見られた。

① 親鳥の他の動物(ハシボソガラス・サギ類・カルガモ・コイなど)に対する追いは、2) 特徴的な行動など。

町の事例を含めて5月下旬となっている。

1) 庄内地方における産卵行動等

今回を含めて4回の産卵行動があったが、いずれも4月20日頃、孵化は、秋田県象潟

4. まとめ

して幼鳥が立ち上がり右足の脚輪を確認。幼鳥はまだ飛び立っていない。

も盛り込んで、くちばしを背中で休息の姿勢。オオもほぼ休息モードである。しばらくも消えて地面に座り込んで冷たさを感じられない場所だった。オオ親鳥以外は、3羽と

白鳥の家族群がいる場所は、池の周りに吹いている風がほとんど感じられない場所。雪明の幼鳥の痕跡がない。

に青米が残っている状態。カルガモが一生涯懸命に食べている。池の周囲に12月に行方不明の幼鳥の痕跡がない。

春本番を感じるような陽気池の白鳥は残念ながら親子4羽とも確認できた。4羽の白鳥は、池の北東隅の陸の上で、座って休んでいる。採餌行動をとっていない。餌場のクライ

泥だらけで、同じように食べ物を捜そうとしていたことが伺える。

えているところから何とか食べ物を捜そうとする行動あり。もう一羽の幼鳥のクチバシもい)とにかく餌不足だ。ひもじさを何とかというのであろう。水が流れて少しだけ土の見

いた。人間から餌をもらっている様子はない。(そこまで行くところに、人間の足跡がない。池の周りの雪も大部少なくなったが、まだ地面が見えない。4羽の家族群は、給餌場に

15) 264日 2月11日

16) 278日 2月25日